

## 江戸時代の新田開発における岡山藩の特徴 Characteristic of development of new field on Okayama Domain in Edo Period

○廣瀬 裕一\* 後藤 眞宏\* 島 武男\*\*  
Yuichi HIROSE, Masahiro GOTO, Takeo SHIMA

**1.はじめに** 本企画セッションは、「岡山藩の土地改良における水土の知」をテーマに、岡山藩領であった現在の岡山市等で利用される土地改良施設や水利システム等にどのような特徴があるかを議論する。ここでは、戦国時代から江戸時代初頭にかけてわが国で全国的に行われたと考えられる新田開発の整理から、岡山藩の新田開発の特徴を検討する。

**2.江戸幕府成立前後のわが国の耕地面積の増加** わが国には、水田等に灌漑用水を送る農業水利システムが各地で整備されている。その中には、江戸時代等の近世に整備されたものが現在でも利用される場合が散見される。

大石（1973）は、1936年に土木学会が出版した「明治以前日本土木史」から、有史以来慶応3年までに行われたわが国の主要な用水土木工事全118件の内、約40%にあたる47件は戦国時代から徳川家光の治世の185年間に集中しており、特に慶長元年（1596年）から慶安4年（1651年）までの江戸時代初頭56年間に33件が行われたことから、わが国の明治以前の用水土木工事は戦国時代から江戸時代前期に集中していることを指摘する。その理由は、戦国時代から江戸時代前期の領主権力が、用水土木技術によってそれまで未開発であった大河川流域の沖積層を水田化することに成功したためと考察する。これは、わが国の耕地面積の推移（表1）で、1450年頃から1600年頃、1720年頃と順調に耕地面積を増加させ、1720年頃から1874年の間の増加量が小さいことから伺える。

**3.江戸幕府成立前後の新田開発の特徴** 農業土木歴史研究会（1988）によれば、江戸時代に新田開発が行われた理由は、江戸幕府が米の生産量を基準として耕地に石高を割り当て、米を年貢の形で徴収することを経済的・財政的基盤としたためとしている。これにより、米を確保することが政策の基本となり、その最も重要な手段として新田開発が登場した。江戸幕府成立前後に新田開発が行うことができた理由は、戦国時代から築城や道路建設、鉱山採掘等の軍事用途に用いられた土木技術があったためである。新田開発は、東日本と西日本で特徴が異なり、東日本では山林原野の開墾や河川流域に分布する湖沼や低湿地の干拓といった内陸部の開発を主としたのに対して、西日本では主に干潟の干拓で海岸部の開発を主とした。この理由は、西日本は江戸幕府成立前後の時期において既に、陸域に未

表1 わが国の耕地面積の推移

Transition of farmland area in JAPAN		
年代	耕地面積 (町歩 ≒ ha)	出典
1450年頃	946,000	拾芥抄
1600年頃	1,635,000	慶長3年大名帳
1720年頃	2,970,000	町歩下組帳
1874年	3,050,000	第1回統計表

大石（1973）を加工

\*農研機構農村工学研究所（National Institute for Rural Engineering）

\*\*農研機構九州沖縄農業研究センター（Kyushu Okinawa Agricultural Research Center）

キーワード：岡山藩、歴史的な土地改良施設、熊沢蕃山、津田永忠、干拓

開墾地がほとんど残されていなかったためである。開発時期も、西日本は江戸時代前期に開発のピークを迎えるのに対して、東日本の開発のピークは幕末期であった。本企画セッションで議論する岡山藩も、主に干拓による新田開発が行われた。

**4.岡山藩の新田開発の特徴（まとめ）** 百間川研究会（2009）によれば、岡山藩で新田開発が行われるようになった直接的な要因は、1656年に当時の岡山藩主池田光政が出した「新田開発令」にある。1654年の岡山藩の米の収支は、収入88,200石に対して支出が104,017石と耕地不足が深刻であったため、新田開発の実施は必然であったと指摘する。

岡山藩の干拓は、前期は主に民営で小規模なものが実施されるが、後期は藩営で大規模なものが実施されたといった特徴がある（表2）。特に大規模な藩営干拓を実施できた背景には、津田永忠等の岡山藩の役人と河内の石工の存在がある。

1692年に完成した沖新田干拓（図1）は、新田開発と洪水時に旭川の洪水を分流させる放水路兼幹線排水路「百間川」の整備が特徴である。この百間川の整備には、陽明学者である熊沢蕃山の「川除けの法」の考えが影響した。「川除けの法」は、流域の森林資源の保護と、放水路と河川本流に放水路への越流堤を整備する総合的な治水論である。放水路下流域での新田開発は、排水効果を妨げ治水に悪影響を及ぼすため、熊沢蕃山は沖新田干拓には反対していた。

これに対して津田永忠による沖新田干拓構想は、放水路下流域で干拓による新田開発を行いつつ、排水にも配慮することが特徴であった。この構想を可能にしたのは、石工によって利用が可能となった河川を横断する水路橋「石の掛樋」や排水路最末端の排水溜「大水尾」に設置された排水樋門「唐樋」である。石の掛樋は、新田の開発で新たに必要となる用水を吉井川から得ることを可能とし、唐樋は、農業排水や洪水を児島湾に安定して排水することを可能とした。以上の水利システムは、岡山藩の新田開発の特徴の一つと考えられる。

表2 岡山藩の干拓

Reclamation in Okayama Domain			
年	名称*	面積（町歩）	開発主体
1632	中川	120.0	民営
1647	福泊	35.0	藩営
1650	西湊	31.0	民営
1650	福吉	25.0	民営
1663	松崎	107.1	藩営
1663	円山	71.0	藩営
1671	金岡	232.4	民営・藩営
1679	倉田三	329.1	藩営
1684	幸島	561.7	藩営
1692	沖	1918.0	藩営

\*名称は「○○新田」の「新田」を省略  
百間川研究会（2009）を加工

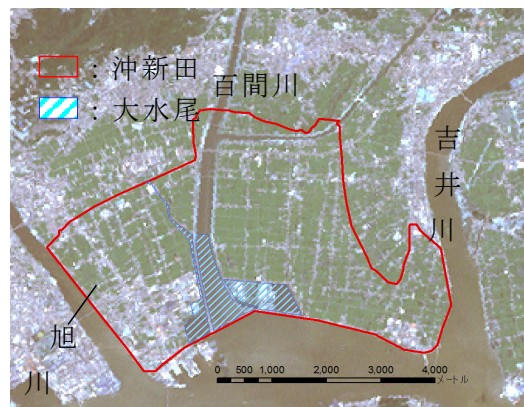


図1 沖新田と大水尾  
Okisinden and Ohmio

大石慎三郎（1973）：近世中期の新田政策，學習院大學經濟論集 10(3), 59-76.

農業土木歴史研究会（1988）：大地への刻印，公共事業通信社.

百間川研究会（2009）：児島湾北岸の新田開発と用水の変遷.